

A Contrastive Study of Tense Systems in Japanese and English : With Reference to the Error Tendencies of English Learners

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30397

日英語時制体系の対照言語学的研究： 英語学習者の誤用の傾向を踏まえて

守屋哲治

A Contrastive Study of Tense Systems in Japanese and English: With Reference to the Error Tendencies of English Learners

Tetsuharu MORIYA

1. はじめに

言語能力を、他の認知能力から独立したものと主張する生成文法を批判的に検討する中から生まれた認知言語学では、言語の主たる特徴を認知主体の概念化に置くことにより、言語能力を一般的認知能力の一部に位置付けている。

このような言語の捉え方をとする認知言語学は、言語使用者の言語外的状況との関わり方も研究対象としており、言語外的要因との関わりを無視することができない言語習得研究および言語教育研究などより関連性を深めている。¹例えば Talmy (2000)は衛星枠付け (satellite-framed) と動詞枠付け (verb-framed) という二つの事象の言語表現類型を提唱しているが、これは人間が事象を認知する時のあり方、すなわち認知フレームの類型を反映していると考えられており、この認知フレームの違いが言語習得にどのような影響を及ぼすかについても研究が行われている。²

本研究は、時制体系の違いが母語の時制に関する認知フレームの違いを反映しているとの観点から、日英語の時制体系に関する認知フレームの違いがどのように第二言語としての英語習得に影響を与えるのかを、日本人英語学習者の時制に関する誤用をとりあげて考察する。

本論文の構成は以下の通りである。次節では、先行研究としてまず、Talmy (2000)が提唱する事態把握の類型論的違い、およびそのような事態

把握の違いの第二言語習得への応用的研究を紹介する。次に、3 節では、時制の分析に関する先行研究を紹介し、日英語の時制体系の違いをどのように捉えることができるか、さらにその体系の違いが第二言語習得の際にどのような影響をもたらすかを考察する。4 節では、3 節で見た日英語の時制体系の違いを認知フレームの違いと捉えて、日本語母語話者の英語時制習得に関する習得段階を設定し、英語学習者の誤用の傾向を参照しながら妥当性の考察を行う。

2. 先行研究

2.1. 「衛星枠付け」と「動詞枠付け」

Talmy (2000: Chap. 3)は、いくつかの事象 (event)の連続が、一まとまりの事象として単一節で言語化される現象に着目し、そのひとまとまりとして言語化される事象をマクロ事象 (macro event)と呼んでいる。マクロ事象には、「移動 (motion)」、「状態変化 (change of state)」、「時間的輪郭 (temporal contouring)」、「動作相関 (action correlation)」、「実現 (realization)」が挙げられているが、これらのマクロ事象を構成する個別事象がどのような要素によって言語化されるかを基準とした言語類型を試みている。

その類型として挙げられているのが、「衛星枠付け」 (satellite-framed) と「動詞枠付け」 (verb-framed)である。これは、マクロ事象の核となるスキーマが節内のどの要素によって主に

表現されるかによる類型である。

例えば、「移動」における核となるスキーマは移動する主体の「経路」(path)であるが、衛星枠付け言語では、動詞や動詞の補部以外の要素(これを Talmy (2000)では衛星 (satellite)と呼んでいる)で表現する傾向があるのに対し、動詞枠付け言語では、経路は動詞で表現する傾向がある：

(1) a. John walked out.

b. ジョンは歩いて出て行った。

衛星枠付け言語に分類される英語では、(1a)のように主体の場所の変化を表す場合、その経路は out のような衛星で表されているが、動詞枠付け言語に分類される日本語では (1b)の「出る」のように、動詞が移動とともに経路を含んでいる。一方、移動の様態に関しては経路とは逆に英語では動詞によって表されているのに対し、日本語は「歩いて」という形で衛星として表現されている。

この言語類型的分類の妥当性について、考慮すべき点はいくつか指摘されている。例えば、動詞枠付け言語とされている日本語にも、「外に出る」のような衛星枠付けと考えられる要素が存在したり、衛星枠付けとされる英語にも、動詞枠付けを可能にするような動詞 (例えば arrive, depart, enter, return など)が存在している。また、中国語のように経路も様態も同じように動詞で表現する言語も存在し、上記の2種類の類型だけでは説明がつかない現象があることがわかっている。しかしながら、心理言語学的実験を行っている Slobin (2004) は英語母語話者が衛星枠付的表現を嗜好し、日本語母語話者が動詞枠付的表現を嗜好する傾向があることを示していたり、それぞれの言語における語彙の構成などを考慮すると、上記の類型は大枠においてそれぞれの言語の傾向を表していると考えられている。

2.2. 言語習得への応用研究

Inagaki (2002)は生成文法的言語習得理論の観点から、日本人英語学習者の英語様態動詞を用いた文の解釈実験を行っている。衛星枠付け言語である英語では、動詞が移動と様態を表すことが可能であるため、(2)のような文は多義になる：

(2) John swam under the bridge.

この文の under the bridge は泳ぐ行為が行われた「場所」を表す解釈と、移動の「着点」の解釈が可能である。後者の解釈は動詞 swim が様態だけでなく、移動も表すという衛星枠付け言語特有の特徴を理解していないと気付くことができない。Inagaki (2002)によれば、日本人英語学習者は一貫して後者の解釈に気づくことができなかったとの実験結果を提示し、第二言語習得におけるいわゆる「肯定的証拠」(positive evidence)の必要性を主張している。

Caiderno (2008)は動詞枠付け言語と衛星枠付け言語を対照させる形で、母語と異なるタイプの事態のフレーム化習得に関する研究を概観している。衛星枠付け言語であるオランダ語を母語とする学習者が動詞枠付け言語であるスペイン語で移動事象を描写する場合とスペイン語母語話者がオランダ語で移動事象を描写する場合にそれぞれ母語の特徴が見られることを報告している Caiderno and Lund (2004)の研究や、スペイン語母語話者が英語を習得する際に、上級の学習者であっても様態を含まない動詞を移動事象の記述に際して用いる傾向があることを報告している Navaro and Nicholadis (2005)の研究などが紹介されている。

Spring (2010)は、移動の経路も移動の様態も同様の文法形式によって表す中国語母語話者と日本語母語話者の英語学習者を対象にして、英語の移動事象の表現形式の習得に関する実験を行っている。それによると、中国語母語話者のほうが、英語の認知フレームを反映する衛星枠付けを日本語母語話者よりも習得している度合

いが高いことが報告されている。これは、英語の認知フレームと一部類似性を持つ中国語と、類似性をもたない日本語との認知フレームの違いが影響していると考えられる。ただし、習得段階との関連については、中国語母語話者、日本語母語話者の両方について、TOEFLの点数などの英語能力の指標よりも、英語圏の滞在期間のほうがより英語のフレーム化に影響をおよぼしているというデータを示しており、第二言語の認知フレームを習得するためには外国語としての教室での学習だけでなく、その言語が実際に話されている環境での生活経験などが必要であることを示唆している。

3. 日英語の時制

3.1. 英語の時制体系の記述

時制体系の意味記述においてしばしば言及され、この分野の議論の出発点になることが多いのが Reichenbach (1947) である。この本自体は論理学の教科書であり、時制に関してもこの本の一つの章で触れられているに過ぎないが、そこで示されている道具立てを元にして時制体系を記述する試みがなされている。³

Reichenbach (1947) では、発話時点を表す *Speech Time* (以下 S)、時制要素が指す時点を表す *Reference Time* (以下 R)、そして、言及されている事象が起こる時点を表す *Event Time* (以下 E) の三つの時点を原始要素とし、この三つの時点の相互関係によって時制体系を表している。

S は、典型的には発話時点を指す。発話時点は発話が行われる場面によって変化するという点で、I や you のような代名詞と同様に直示的 (deictic) な性質を持つ。E は、述部で表されている事態が起こる時点を指す。

「未来」は「発話時点よりも後に述部が表す事象が起こる」という意味であるとする、(3a) のような未来時制の文の意味は(3b)のように表すことができる：

(3) a. John will kiss Mary.

b. S_E

(3b) は E が S よりも時間的に後に位置していることを表している。同じように考えると、(4a) のような現在時制の意味は(4b)のように、(5a) のような過去時制の意味は(5b)のように表せることになる：

(4) a. John is kissing Mary.⁴

b. S, E

(5) a. John kissed Mary.

b. E_S

ここまで見る限りでは、S と E の関係を示すだけで時制の意味が表せるように思える。上記の表記に R を含めると、(6) のようになる。

(6) a. S_R, E (未来時制)

b. S, R, E (現在時制)⁵

c. R, E_S (過去時制)

(6) で R が余剰な要素に思えるのは、R が E と同一の時点に存在しているからである。しかし、(7) の文の場合にはどのようなようになるだろうか？

(7) a. John will have left at 3 o'clock.

この文では John が出発するのは、未来時制が示す 3 時よりも以前ということになるので、E は R よりも先行する位置にあることになる。また、R は未来時制なので、S よりも後に来る。以上のことを踏まえると、(7a) の表す時制は(7b) のようになる：

(7) b. S_E_R

また、(8a) の文も自然な解釈としてはジョンが仕事場を出るのが午後 3 時以前になるので、この文の時制は(8b) のようになる：

(8) a. At 3 P.M., John had left the office.

b. E_R_S

このようにRは完了時制の場合にEと異なった位置を占めることでその存在が明示されるが、単純時制の場合であっても時制体系の解釈の根底にRが存在するとされている。

次に、Reichenbachの枠組みを用いて、日英語の時制体系の対照を行っている太田(1977)およびOta(1972)の研究を概観する。

3.2. 日英語の時制体系の対照

3.2.1 単文の時制

日本語には、動詞自体が屈折をして文法的に時制を表すという仕組みは存在しない。基本的に、未完了を表す「ル」形と完了を表す「タ」形との対立を持ち、未完了が現在の出来事および未来の出来事を表す機能を果たしている。

日本語と英語の時制体系の違いをReichenbachの枠組みを用いて述べるとおおよそ次のようにまとめられる。英語にはSとRとの関係で一次的時制(primary tense)を表し、RとEとの関係で二次的時制(secondary tense)すなわち完了・非完了を表すのに対して、日本語にはRが存在しないために、基本的時制が存在せず、Sが直接Eと関連づけられる。⁶

太田(1977)は、上で述べた日英語の時制体系の違いと相に関するそれぞれの言語の特徴を合わせて比較し、日本語の学習者にとって以下のような点が困難であるとの予測を行っている。

(9) a. 英語の現在形と未来形の区別

b. 英語の過去形と完了形の区別

c. 日本語では「ている」が現在の状態、進行相、完了相、結果相などを表すため、英語の単純現在形、進行形、完了形相互の混同が起きやすい。

(9a,b)は、英語にRが存在しS_R、あるいはR_Sという関係をとることがそれぞれ過

去時制および未来時制の根底にあるのに対し、日本語ではRが存在しないことから帰結として当然予想されることである。(9a)の困難点が元となって過剰一般化が起こった結果(10)のような誤用が起こるとしている：

(10) a. *If you (will) explain it, he surely understands it.

b. *Some day he surely becomes a fine player.

c. *Some day, he is loved by everybody.

d. *It is cold tomorrow.⁷

太田(1977: 239)

(10)の例はいずれも、日本語であれば「ル」形に対応するため、英語でも、正しい未来形の形ではなく、単純現在形の形にしてしまう誤りである。(9b)が原因となった誤りの例は(11)に挙げられているようなものである：

(11) a. *She was a student for the last few years.

b. *She was sick for two years by then.

太田(1977: 239)

日本語では過去と過去完了の区別が存在しないため、副詞との共起関係からその違いを説明することが多いが、それでも(11)のような誤りが多いことは多くの英語教員が実感しているところだと思われる。(9c)に起因する誤用は「ている」が対応する概念領域が広いため、いくつかのタイプになって出現する。その一部を挙げたのが(12)である：

(12) a. *John is departing. (for 'John has departed.')

b. *He is visiting Japan in 1921. (for 'He visited Japan in 1921.')

c. *John is resembling his father./*John is belonging to this club.

d. *The train has been arriving. (for 'The train has arrived.')

e. *He has written the letter for two hours.

太田 (1977: 240-241)

(12a)は完了形を用いるべきところを進行形を用いることによる誤り、(12b)は過去時制を用いるべきところを現在進行形を用いる誤り、(12c)は状態動詞であるので進行形にしなくとも継続を表せるのに、進行形にしてしまう誤り、(12d)は現在完了形を用いるべきところに現在完了進行形を用いてしまう誤り、そして(12e)は逆に、現在完了進行形を用いるべきところに現在完了形を用いる誤りである。

このように「ている」が、英語では複数の形式に対応するような広い領域をカバーしているのも、日本語の概念体系にはRが存在しないということが一因であると考えられる。そしてこのような概念体系の違いに起因する誤りは、純粋に形式的な誤りに比べてなかなか修正しにくいということも予想される。太田 (1977)では、高校生に対する和文英訳問題の誤りの調査も行っているが、(9a-c)のような要因に基づく誤りは、過剰一般化が原因となっているので克服しにくいという予測を立てて分析し、おおむねその予想は妥当であると結論づけている。このような誤りの現象は、見方を変えれば、日本語母語話者と英語母語話者の事象の時間的・相的把握の違いを反映しているとも考えられる。

3.2.2 複文の時制

Ota (1972)は、日英語の複文における時制体系の比較を、やはり Reichenbach (1947)の枠組みを用いて行っている。その分析によると、英語の場合は、一部の例外を除いて、従属節のRは主節のSと直接関係づけられるのに対して、日本語の場合はRが存在しないため、従属節のEは、主節のEとの相対関係でまず捉えられ、その主節のEがSと関係づけられるという意味で、間接的にSと関係づけられているとしている。もし、日本語で従属節のEが直接Sに関係づけられたとすると、Rが存在しない日本語では、主

節のEと従属節のEとの時間関係を位置づけることができなくなる。

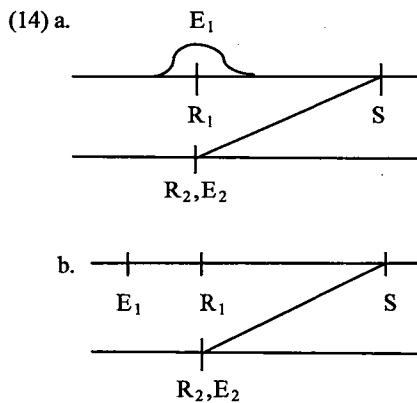
従属節は、大きく副詞節、関係詞節、名詞節の3種類に大別できるが、Ota (1972)が取り上げているのは、時を表す副詞節、関係詞節、間接話法を示す名詞節である。

副詞節を例に日英語の対比を示す。(13a,b)に挙げた英文の時点の関係はそれぞれ概略(14a,b)のように示すことができる：

(13) a. John was reading₁ a book when I entered₂ the room.

b. John had left₁ when I arrived₂ there.

Ota (1972: 123)

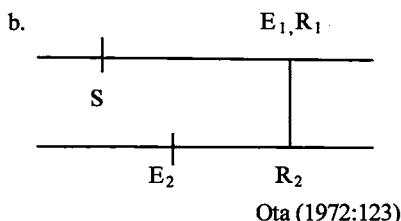


Ota (1972: 123)

(13a,b)において、従属節が過去形になっているのは、従属節のRが、Sに直接関係づけられていることの表れであり、そのことが(14a,b)におけるR₂(およびE₂)とSを結ぶ線で表現されている。このように英語では従属節のRがSと直接関係付けられるのが通例であるが、そうでない場合もある。それが(15a)のような文の場合であり、時点の関係は(15b)ようになる：

(15) a. I will lend₁ you the book tomorrow when.

I have finished₂ reading it.

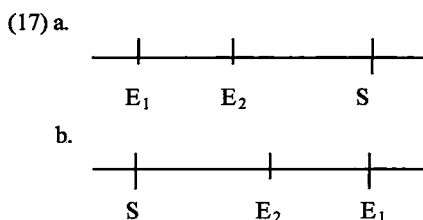


(15a)において、従属節が未来完了形ではなく現在完了形になっているのは、従属節のRがSではなく主節のRと関係付けられていることを示している。言い換えれば、従属節の現在完了形は、主節の指す未来時点を基準としているということになる。⁸

日本語の場合にはRが存在しないため、E₂はまずE₁と関係付けられることになる。つまりE₂の形は基本的にはE₁に先行するか否かによって決まってくる。

- (16) a. ご飯が終わる₂まで、待ちました₁。
 b. 日本語を二ヶ月勉強した₂後で、日本へ行きます₁。

(16a,b)のSとEの関係を図示すると、それぞれ(17a,b)のようになる：



(17a)において、E₁はSに先行しているため、主節の動詞は「タ」形をとっているが、E₂はSとの相対的位置関係ではなく、E₁との相対的位置関係で動詞の形が決まるため、E₁に後続することにより「ル」形をとっている。同様に(17b)で、E₁はSに後続することにより主節の動詞は「ル」形となるが、E₂はE₁に先行することで「タ」形が用いられている。(16)のようなケースは、

英語の体系との違いがはっきり表れており、日本語を学習している英語話者の以下のような誤りも、この点で日英語の体系の違いから予測されるものであると言える：

- (18) a. ごはんが終わったまで、待ちました。
 b. 日本語を勉強する後で、日本へ行きます。
 c. 夏休みになったとすぐ、ヨーロッパへ行きました。

英語では従属節のRがSと関係付けられるため、Sよりも先行する従属節のRは、過去形になり、Sよりも後続するRは未来形で表されることになる。それをそのまま日本語にも過剰一般化してしまうことにより上記のような誤りが起こると考えられる。

Reichenbachの体系を用いて日英語の時制体系を対照し、どのような誤りが予測されるかという点にも言及した太田(1977)およびOta(1972)を紹介したが、これらの研究で述べられている時制の体系の違いは、認知言語学的な観点から認知フレームの違いと捉えることが可能であり、この点からも重要なものであると言える。しかしながら、これらの研究が発表された時代は、第二言語習得研究がいまほどは盛んではなく、実際の習得を扱った研究との関連が薄く、単文や複文の時制体系が、どのように習得段階と関係するかなど未解決の部分も多く残っている。

そこで、次に第二言語としての英語の時制に関する習得の研究を紹介し、第二言語としての英語の時制習得において、どのような知見が得られているかを見る。

3.3. 日本人学習者の英語時制の習得に関する先行研究

Okuwaki (2002)は生成文法の理論的枠組みで、第二言語習得での屈折形態素の習得に関する理論的問題を取り上げているが、具体的には、日本人学習者の英語の過去形の習得データを用い

ている。対象となっているのは、成人の中級および上級英語学習者で、英語発話における過去形の使用の誤りを調査し、その傾向を分析している。それによると、以下のような傾向が見られるという：

- (19) a. 上級者は発話タスクの種類にかかわらず一貫して高い正確さを見せたが、中級者の正確さはタスクによって変動し、多くても 70 パーセントにとどまっている。
 b. 上級者は、動詞の種類によって正確さに変動は見られなかったが、中級者の場合は本動詞よりも助動詞において誤りがより多く見られた。
 c. 上級者・中級者ともに主節よりも従属節において誤りが多く見られた。
 d. 上級者の場合、過去形を用いない誤りはほとんど従属節で見られるが、中級者の場合は主節、従属節のどちらでも見られる。

Okuwaki (2002)は(19d)の原因を L1 からの転移と考えているようだが、前節でみたとおり日本語の従属節では、「ル」形が特に好まれるということはないので、日本語では従属節に「タ」形を使わない傾向が L2 に転移しているという説明は疑問が残る。そもそもなぜ(19d)の傾向が中級者には見られず、上級者に見られるのか、という点についてはどのような見解をとっているのかがはっきりしない。(19a-c)に関しては、過去時制の習得が段階的発達の要素を持っていることを示していると主張しているがそれは妥当な結論であると思われる。ただ、(19)で挙げられたような傾向を説明するにあたって、Okuwaki (2002)は V-to-T 移動のような生成文法の理論を用いているが、認知言語学的な観点からこれらの現象に対する説明をすることも可能であろう。

そこで、次節では今までの議論を踏まえて、時制の体系を認知フレームととらえる考え方で

は、第二言語である英語の時制体系の習得段階に関してどのような理論的説明を与えることができるかを検討していくことにする。

4. 認知フレームとしての時制の習得

2 節では、Talmy の提示した「衛星枠付け」と「動詞枠付け」の言語類型を、人間が事態把握をするときの「見立て(construal)」の違いを反映する認知フレームの違いであると解釈した上で、この認知フレームの違いが第二言語習得に与える影響を取り上げた先行研究を概観した。

本節では、3 節で見た日英語の時制体系の違いも時制に関する認知フレームの違いと解釈し、このような認知フレームの違いが、日本語母語話者による英語時制の習得にどのように影響するのかを考察する。

日本語母語話者の英語時制の習得は次のような段階を経ると仮定することができる：

- (20) I. 日本語と同じ S, E からなる体系を英語にそのまま持ち込む。
 II. 英語の S, R, E からなる体系を獲得する。
 (複文構造では R_2 がまだ S と関係づけられない)
 III. 複文構造において R_2 を S と関係づけられるようになる。

日本語と英語の時制に関する違いは、英語が R を持ち、S は R を介在させて E と関係づけられるのに対し、日本語は E が直接 S と関係づけられるというものであった。この考え方に基づく、日本語母語話者にとっては、まず日本語には存在しない R を習得することが第一段階になる。R が習得されない(20 I)の段階では、単文においても複文においても時制の形式が一定しないと考えられる。R を習得することによって、過去形と過去完了形の区別や、未来完了形の意味が理解できるようになる。しかし、複文では E が複数存在するため、複数の E を関係づける方法は別に習得する必要がある。従って、II の

段階まで来ても、複文における関係付けを習得していなければ、複文構造(従属節)における誤りが残ると予想される。このように、時制体系を認知フレームと捉える見方でも、(20)のような段階発達を想定することが可能である。

(20)のような発達段階に関する仮説の妥当性を確かめるためには、複数の側面からの検証が必要となる。ひとつには言語習得のレベル差によって、時制に関する誤りの差が出るかということ調べる必要がある。Okuwaki (2002)は、そのような差があるとの結果を出しているが、被験者10名で、口頭発話のみを対象にしているため、この点に関するより多面的なデータ収集をしなければならない。また、学習者の母語の時制体系の違いが英語の時制の習得に影響を与えているとすれば、日本語とは異なる母語を持つ第二言語英語学習者はどのような段階を経て英語の時制を習得していくのか、あるいは、英語母語話者はどのような段階を経ているのか、といった対照的なデータを収集する必要もある。

本研究では、まず手始めとして日本人大学生の英作文の分析を行った。2つの大学(A大学とB大学)の大学生合計78名(A大学1年生23名、B大学2年生52名)にワンパラグラフからなるものと、複数パラグラフからなるものの2本のエッセイを、ライティングの授業の中で作成させた。授業ではパラグラフ構成、エッセイの構成などについて解説、演習を行い、それぞれアウトラインを作成させた上で下書きを書かせ、それをピアレビューおよびセルフチェックした後に清書させ提出させた。このようなプロセスを経ている点で、Okuwaki (2002)で収集されたデータとは、話し言葉と書き言葉という点だけでなく、明示的モニタリングの機会を与えているか否かという点でも異なったデータとなっている。

提出された英作文の文の総数、単文・複文の割合を示したのが(21)である：

(21) 文総数

ショート・エッセイ

	文総数	複文	割合	単文	割合
A 大学	613	308	50%	305	50%
B 大学	1005	418	41%	587	58%

ロング・エッセイ

	文総数	複文	割合	単文	割合
A 大学	1409	700	50%	700	50%
B 大学	3017	1347	44%	1670	56%

A大学とB大学の文の総数の差は、被験者の数の違いを反映したものである。A大学とB大学の学生を比べると、概してA大学のほうがB大学よりも英語の習熟度が高い学生が多いが、単文と複文の割合の違いはそのような習熟度の違いも関係していると考えられる。そして、それぞれの項目別に時制に関する誤りの数を示したのが(22)である：

(22) 時制の誤りの数

ショート・エッセイ

	複文	割合	単文	割合
A 大学	16	5%	4	1%
B 大学	10	2%	16	3%

ロング・エッセイ

	複文	割合	単文	割合
A 大学	38	5%	9	1%
B 大学	105	8%	50	3%

「複文」の項に記載されている数字は、複文の従属節に生じている時制の誤りの数、「割合」は各項目の文の総数に対する誤りの数の割合を示している。

時制に関する誤りの数は全体的にそれほど多くはないが、割合で見ると単文よりも複文の従属節における誤りが多いことがわかる。時制の誤りの数の差について、各項目同士の有意差(0.1%水準)の有無について調べた。

(23) 各項目同士の有意差判定

ショート・エッセイ

- a. A 大学単文/B 大学単文 有意差なし
 b. A 大学複文/B 大学複文 有意差なし
 c. A 大学単文/A 大学複文 有意差あり
 d. B 大学単文/B 大学複文 有意差なし

ロング・エッセイ

- e. A 大学単文/B 大学単文 有意差なし
 f. A 大学複文/B 大学複文 有意差なし
 g. A 大学単文/A 大学複文 有意差あり
 h. B 大学単文/B 大学複文 有意差あり

(23c, g, h)から A 大学、B 大学ともに従属節での誤りが主節での誤りよりも多いことがわかる。これは Okuwaki (2002)が示した傾向と合致する。ただし、(23d)が示す通り、B 大学のショート・エッセイに関しては単文での誤りと、従属節での誤りととの有意差が見られなかった。これは B 大学の学生の習熟度が全体的に A 大学よりもやや低いことと関連しているかもしれないが、それを確かめるためには、習熟度との関連をよりきめ細かく調べる必要がある。

A 大学と B 大学の誤りの差に関しては、エッセイの種類、主節・従属節の違いに関わらず有意差が見られない。これも習熟度との関連をより細かく調べる必要があるが、A 大学、B 大学とも全体としては少なくとも(20 I)の段階はクリアして、(20 II)の段階に入っているとも考えられる。

今回提示したのは、パイロット的な調査結果であり、(20)に示したような発達段階の存在を確かめるには、今後複数の方法でデータを収集、個々の誤用データも、語彙・文脈面などの点からより詳しく分析をする必要がある。しかし、少なくとも(20 III)の段階の存在を示唆するようなデータは得られたのではないかと思う。

6. まとめ

「衛星枠付け」と「動詞枠付け」が認知フレー

ムの違いとして、第二言語習得研究で取り上げられているように、Reichenbach の時制体系に基づいた、太田 (1977)および Ota (1972)の日英語の時制体系も認知フレームと捉え、それに基づいた時制の習得段階の仮説を立てた。そしてこの仮説を検証する第一歩として、大学生の英作文中の時制に関する御用の分析を行い、writing の場合にも従属節における誤用が主節の誤用よりも多いことがわかった。

今後の課題として、まずは、時制体系自体の検討をしなければならない。太田 (1977)、Ota (1972)以外にも Reichenbach の理論を元に行っている Comrie (1985)、Hornstein (1990)、Declerck (1991)などの時制体系も視野にいれ、言語事実との整合性などからその妥当性を検討する必要がある。また、このような時制体系を認知モデルと考える以上、時制に関してどのような認知モデルの類型が可能なのかを考える必要もある。そのためには、時制に関する類型論的研究を調べ、どのような時制体系が典型的な違いを説明するのに適しているのかを考えなければならない。さらに、日本語や英語の母語話者がどのような発達段階を経て時制を習得するのかも確認する必要がある。

言語理論と言語習得理論との結びつきはまだ全体としてそれほど強いとは言えないが、このような研究がすこしでもその結びつきについて考えるきっかけを提供できれば幸いである。

謝辞

本研究のデータ分析にあたっては、金沢大学大学院教育学研究科の清水宏幸氏の協力を得ました。本研究は平成 23 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号 22520556)の補助を一部受けて行われています。

注釈

1. Pütz et al. (2001), Robinson and Ellis (2008),

Littlemore et al. (2010) のような、認知言語学と言語習得の問題を関連付けた理論的および実験的研究を取り扱った論文集が複数出版されていることも、このような関連性の深さを示している。

2. Talmy (2001: 287) 自身もこのような言語表現類型は思考の根底にある概念の統合のパターンを反映していると考えている。
3. Reichenbach (1947)を出発点として、時制体系を提案している研究として、Comrie (1985), Hornstein (1990), Declerck (1991)などが挙げられる。
4. 動作を表す動詞の単純現在形が、発話時点における動作を表すことはまれであり、スポーツの実況や、料理番組での解説などの特定の状況でしか起こりえない。従って、ここでは現在進行形が用いられている。進行形は時制だけでなく相(aspect)の意味が入ってくるが、ここではその部分は問題にしないこととする。
5. 英語の現在時制は、現在の動作・状態を表すだけでなく、未来や過去のことを表す場合がある：

- (i) a. My brother leaves for China next month.
- b. I am eating the dinner last night when the phone rings. I answer it but there's no response.
- c. The area of a circle equals pi times the square of its radius.

Langacker (2001:251)

(ia)は未来、(ib)は過去、(ic)は特定の時点に縛られない普遍的事実を表しており、いずれも学校文法では現在時制の例外的用法として取り扱われているが、Langacker (2001)は、認知言語学的な観点を考慮に入れば、(i)で挙げたような例も含めてすべて「現在時制は発話時点での出来事を表す」というような定義の元で説明可能であると主張している。

6. 寺村(1984)のように日本語の「ル」形と「タ」形の対立をテンスの区別であるとする立場もある。このような立場の研究者が根拠とする事実に対する考察については稿を改めた。
7. 例文の前についている*は、その文が通例容認不可能とされることを示している。
8. このようなケースは、学校文法でも、時・条件を表す副詞節では、未来形の代わりに現在形を用い

るという例外的規則を立てて説明されているが、実際にはこのような環境でも従属節の R が S と直接関連づけられる場合がある：

- i. If the lava will come down as far as this, please let us know.
- ii. The new factory—if it will ever be built —will provide work for 150 people.

Declerck (1984: 280)

Declerck(1984, 1997)はこのようなケースをどのように理論的に位置づけるかの詳細な検討を行っている。

参考文献

- Caidemo, Teresa. 2008. "Learning to Talk about Motion in a Foreign Language." In Robinson and Ellis 2008, 239-275.
- Caidemo, Teresa and Karen Lund. 2004. "Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition: Motion Events in a Typological Framework." In Bill VanPatten et al. eds. *Form-meaning Connections in Second Language Acquisition*. Mahwah, NJ: Laurence Erlbaum, 139-154.
- Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, Renaat. 1984. "'Pure Future' Will in If-Clause." *Lingua* 63, 279-312.
- Declerck, Renaat. 1991. *Tense in English: Its Structure and Use in Discourse*. London: Routledge.
- Declerck, Renaat. 1997. *When-Clauses and Temporal Structure*. London: Routledge.
- Hornstein, Norbert. 1990. *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Inagaki, Shunji. 2002. "Japanese Learners' Acquisition of English Manner-of-motion Verbs with Locational/Directional PPs." *Second Language Research* 18, 3-27.
- Langacker, Ronald W. 2001. "The English Present Tense." *English Language and Linguistics* 5, 251-272.
- Littlemore, Jeannette, Constanze Juchem-grundmann, and

- Susanne Niemeier (eds.) 2010. *Applied Cognitive Linguistics in Second Language Learning and Teaching*. Amsterdam: John Benjamins.
- Navarro, Samuel and Elena Nicoladis. 2005. "Describing Motion Events in Adult L2 Spanish Narratives." In David Eddington ed., *Selected Proceedings of the 6th Conference on the Acquisition of Spanish and Portuguese as First and Second Languages*, Somerville, MA.: Cascadilla Proceedings Project, 102-107.
- Pütz, Martin, Susanne Niemeier, and Rene Dirven (eds.) 2001. *Applied Cognitive Linguistics* (2 vols.). Berlin : Mouton De Gruyter.
- Okuwaki, Natsumi. 2002. "Acquisition of past tense in English by Japanese speakers: Is it a syntactic problem?" *Jacet Bulletin* 35, 79-92.
- Ota, Akira. 1972. "Tense Correlations in English and Japanese." *Studies in English Linguistics* 2, 121-134.
- 太田朗. 1977. 「日英語の比較—時制と相について」『英語学と英語教育をめぐって』, 211-252, 東京 : ELEC.
- Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York: Free Press.
- Robinson, Peter and Nick Ellis. (eds.) 2008. *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition*. New York: Routledge.
- Slobin, Dan Isak. 2004. "The Many Ways to Search for a Frog: Linguistic Typology and the Expression of Motion Events." In Dedre Gentner and Susan Goldin-Meadow (eds.) *Language in Mind: Advances in the Study of Language and Thought*, 157-192. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Spring, Ryan. 2010 "A look into the Aquisition of English Motion Event Conflation by Native Speakers of Chinese and Japanese." *Proceedings of the 24th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 563-572.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Volume II, Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味 第二卷』東京 : くろしお出版